

っていじめを止めて良いのか分からない。」という3つを挙げている⁹⁴⁾。川崎市の子どもの権利委員会(2008)では、「Cyber Bullying」は発見しづらく、誰でもが加害者・被害者になる傾向があるとしている⁴¹⁾。また、Cyber空間で行われるいじめのため、傍観者や観衆の特定は非常に難しいものとなっている(Kowalski,2008)⁴⁸⁾。これらのことから、いじめ項目全体でほとんどに正の相関があったこと、つまり被害者も加害者も経験していることがCyber Bullyingの影響であると示唆される。また、関係性いじめ被害・加害や非身体的いじめ被害・加害と携帯電話・PC使用時間の間で相関が見られたのもこのCyber Bullyingの影響が大きいと考えられる。Willard(2006)による「Flaming」、「Harassment」、「Cyber stalking」、「Denigration」、「Impersonation」、「Outing & Trickery」、「Exclusion or Ostracism」の7つに分類は、いずれも今回使用したいじめ項目の中の「身体的被害・加害」には属さないものである¹¹³⁾。つまり、関係性・非身体的いじめ項目で携帯電話やPCの使用時間との相関があったのは、中学生の間でCyber Bullyingが広がっているのではないかと考えられる。

文部科学省(2007)による調査によると、いじめの認知件数12万4898件のうち全体の約4%にあたる4883件が「Cyber Bullying」とされている⁶²⁾。また、埼玉県教育局「ネットいじめ等対策検討委員会」(2008)によれば、調査した5724人の中で「Cyber Bullying」の被害を受けた中高生の割合は8人に1人と非常に多い数を示している⁸⁷⁾。このように高い割合で行われている理由として考えられるのは、昔のいじめのように、いじめる者がいじめられる者よりも体が大きく、力が強い必要は無く、肉体的に弱者であってもいじめることは可能であるという点である。また、ネットいじめは、偽名のハンドルネームを用いることにより、匿名性の下で行われる。直接的な対面でなされないため、いじめた者はいじめられた者の苦しみの大きさが分からず後悔や同情の気持ちを持ってないのである(Schneier, 2003)⁹¹⁾。つまり、被害者に対して恐怖感を与え、困惑し、悩み苦しんで恐怖に陥っている姿を想像して、加害者は痛快な思いをしているのである。

これまで、いじめ加害者の子どもたちは、絶対的に優位な立場を築くために、集団を成して大勢という数の力に頼っていた。しかし、新たないじめの形では、加害者であることが分からないように匿名で、標的となる子どもに対して一方的に加害行為を加えていく。そこには、被害者が加害者に対して訴えることすらできないという残虐性と、加害者が被害者の気持ちを直接知ることが出来ないという不透明性が隠されている。このように見ても、現代の「いじめ」にはこれまでのいじめに比べ、陰湿・巧妙という特徴があることが示唆される。

② 気質と環境から見た現代の「いじめ」モデル

眼窩前頭前皮質と島皮質が、攻撃的で共感性に乏しいサイコパシクな特徴に関与していることが示唆され、いじめの加害行動につながりうる問題であることが考えられた。

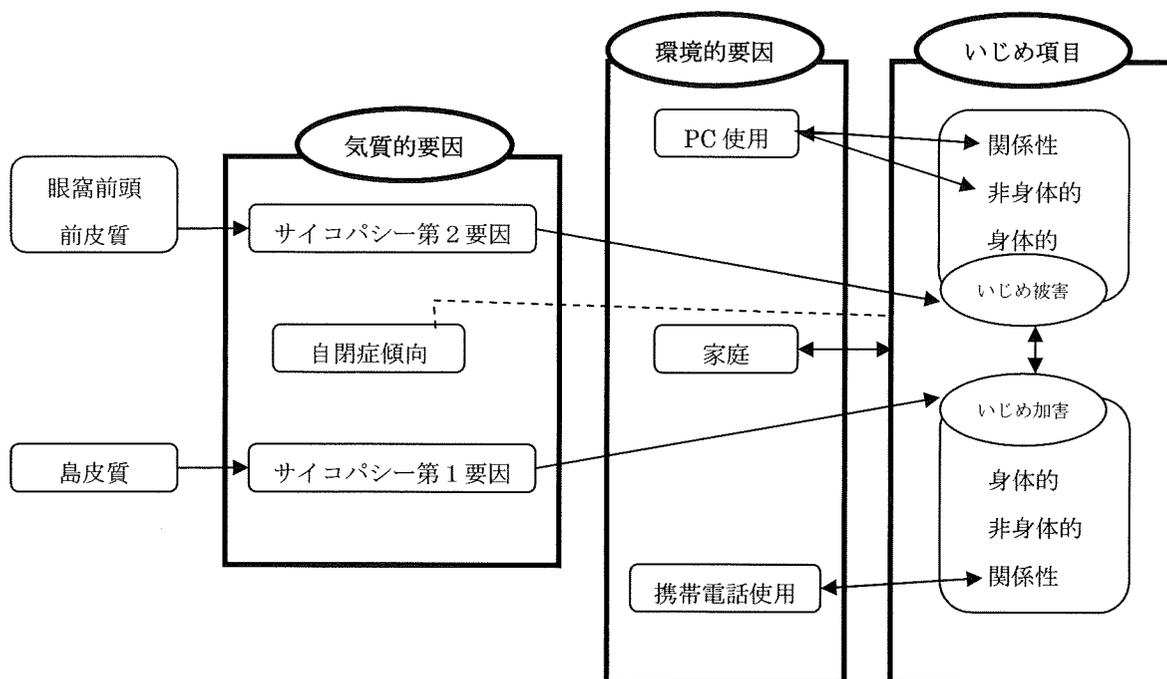
FrSBe を用いたサイコパス傾向と前頭葉機能の關係に焦点を当てた研究(Ross et al., 2007)⁸⁵⁾ によってなされた研究で、犯罪者グループ 169 人を対象に行われ、サイコパシー評価には Levenson Self-Report Psychopathy (LSRP) が用いられた。それによれば、LSRP と FrSBe の下位尺度 (i.e., 内側前頭前皮質, 眼窩前頭前皮質, 背外側前頭前皮質) との關係が示されていることはこの結果を裏付けている。

そして、眼窩前頭前皮質・島皮質が影響しているサイコパス傾向は、サイコパシー第 1 要因がいじめの加害状況に影響を与え、サイコパシー第 2 要因がいじめ被害に影響を与えている可能性が示唆された。反社会的行動様式がいじめ被害に関係していることは、「ノリ」や「盛り上がり」の延長線上にあるインフォーマルな集団で行われる、現代の「いじめ」の傾向・特徴を表しているという一つの可能性が考えられた。また、Sourander ら(2007)の研究から影響關係に関しては疑問が残るもの⁹⁸⁾、いじめ被害と反社会的行動の關係が示唆された。共感性の欠如、罪悪感の欠如といった特徴からくる対人關係上の問題がいじめ加害に関係していることは、相手の戸惑いや困惑している様を見ることを目的とする、対人關係上の問題である共感性や罪悪感の欠如が影響していると示唆された。自閉症傾向に関しては關係が見られなかったが、先行研究からも分かるように、いじめの被害者・加害者になっている可能性は非常に高く、いじめを受けている、もしくは他人にいじめ加害を加えているといった「自覚」がなされていない可能性も考える必要がある。

環境要因では、家庭での安らぎを得られていないほど、關係性・非身体的ないじめ被害を受け、非身体的ないじめ加害をするということが分かった。また、携帯電話の使用が關係性いじめ加害に、PC の使用が關係性いじめ被害に關連していることが示唆された。また、身体的いじめ被害・加害において家庭安らぎ状況との關係が見られなかったこと、携帯電話と身体的・非身体的いじめ加害に、PC と身体的いじめ被害に關連が見られなかったことは現代のいじめの傾向・特徴である可能性が考えられる。

以上を踏まえた上で、氣質的要因・環境的要因の 2 側面から現代中学生の「いじめ」モデルを作成する。(Figure.2)

Figure.2 2要因による現代中学生の「いじめ」モデル



③ 教育臨床の立場から

本研究より、現代の「いじめ」は匿名性が強く、不透明で、陰湿・巧妙な手口で行われているものであることが示唆された。

匿名性が強いということは、いじめ被害者にとって誰かも分からない相手に誹謗中傷され、追いつめられ、恐怖することに他ならない。また、不透明であるが故に、周囲の人々の気づきがどうしても遅くなってしまい、これまでの「いじめ」以上に介入が遅くなってしまう。

一方、加害者はターゲットにした相手の困惑し、悩み苦しんで恐怖に陥っている有様を見て、もしくは直接見るができなくても、そうした様子を想像して、笑いに興じ、痛快な気持ちになるのである。そしてそのことをインフォーマル・グループの仲間内での話題とし、共通の種にして遊び、そのことがまた仲間との一体感・連帯感を感じさせるという、非常に悪質極まりないことであることが伺える。

また、現代の「いじめ」において、いじめ経験が心理的問題におよぼす影響を調べた研究もある。14歳～16歳を対象にした調査では、いじめ被害者・加害者両者の経験がある生徒が最も強い抑うつ傾向を示している(Kaltiala-Heino et al.,1999; Kaltiala-Heino et al.,2000)³⁸⁾³⁹⁾。さらに、いじめによって生じる孤独感は、被害者でのみ見られると考えがちであるが、孤独感に関してもいじめ被害・加害両方の経験者で強い孤独感を示していることが分かる。不安傾向を及ぼす影響を示した研究もあり、これによると、いじめ被害・加

害の両方を経験した生徒が最も高い得点を示している(Kaltiala-Heino et al.,2000; Craig, 1998)¹⁷⁾³⁹⁾。このように、いじめは被害者・加害者両者の経験によって一方の経験よりもより強い影響が生じると考えられる。

気質として、非行的な問題行動はいじめに影響していると考えられ、また、家庭などの環境も関連があることが示唆された。このように現代の「いじめ」にはいくつもの要因が影響・関連していると考えられる。

Ken(1996)は調査研究報告書に、いじめ加害者が自分の家族に対してどのように感じていたかについて、「家族は、被害者が悲しかったとき、共感もしてくれなければ、理解も示してくれない」「家族が問題を抱えたとき、一緒になって対処しようとはしない」「家族では、自分の意見を自由に表明することができない」などを挙げている⁴⁶⁾。これらを見ると、いじめ加害者が家に対してではなく、他の弱い立場の友人に対して、家庭での不満や不安を原因とした攻撃性を向けていることが分かる。

また、深谷(1996)によると、いじめ非行とは非行性のある集団において行われ、もともと強い非行性の集団が内部のメンバーに暴力をふるっているうちに、その行為によって、次第に集団が非行性を帯びたものになって起こるものと述べている²⁶⁾。「中野区中学生自殺事件」や「愛知県中学生自殺事件」などのケースはこの可能性が高く、いじめがエスカレートすることでいじめ非行につながり、自尊感情を失ったいじめ被害を受けた子どもが自殺してしまうという最悪のケースも少なくないため、いじめのエスカレート化によって生じるいじめ非行の存在は無視することはできない。

このように、現代の「いじめ」は不透明で悪質であり、非常に複雑な問題であることが分かる。ここで重要となってくるものが、いじめに関わっている人間に対する周囲の人々の気づきである。つまり、学校では教師、家庭では家族による気づきである。

オールウェイズ(1986)は、学校・家庭でそれぞれ2つの段階での兆候を以下のようにまとめている²⁰⁾。

学校で見られる一次的兆候では、「卑劣なやり方で繰り返しいじめられる、悪口を言われる、屈辱的なあだ名をつけられる、嘲笑される、けなされる、笑いものにされる、威嚇される、おとしめられる、脅される、命令される、支配される、服従させられる」「嘲笑的で非友好的なやり方で物笑いの種にされ、笑いの的になる」などである。二次的兆候では、「休み時間や昼休みにひとりぼっちのことが多く、仲間グループから締め出されている、クラスの中に仲の良い友人が一人もいない」「チームでゲームをする時、最後までチームメイトとして選ばれない」「休み時間に教師や他の大人の近くにいたがる」「クラスでは自分の意見を言うことができず、不安で頼りない印象を与える」「悩みをもっていて、不幸せで、落ち込んでいて、涙もろく見える」「成績が突然または徐々に低下する」である。

一方、家庭で見られる一時的兆候は、「学校から帰ってきたとき、服が破れていたり、本が傷んでたりする」などで、二次的兆候としては「学校が引けてからクラスメートや仲間を家に連れてきたり、クラスメートの家や校庭で一緒に遊んだりすることがほとんどない」

「一緒に遊んだり、買い物をしたり、スポーツや音楽のイベントに行ったり、電話でおしゃべりする仲良しの友人が一人もいない」「パーティーに呼ばれることはほとんど、または全くなく、自分からパーティーを計画することにも関心がない」「朝学校に行くのを怖がったり、渋ったりする、食欲がない、とくに朝、頭痛や腹痛をよく訴える」「学校の行き帰りに普通では考えられないような道を選ぶ」「いやな夢で安眠できない、睡眠中に泣く」「勉強に関心がなくなり成績が下がる」「不幸せで悲しそうで、ふさぎ込んでいる、突然、癩癩を起こしたり感情を爆発させる」「家族からお金をせびったり盗んだりする」である。

学校・家庭の両方とも、一次的兆候はあからさまなもので、現代の「いじめ」においては、被害を受けた子どもも加害をした子どもも隠匿しがちである。そこで重要となってくるものがこれらの二次的兆候であると考えられる。家庭と学校の両方で子どもたちのシグナルを察知することができれば、不透明な「いじめ」への対応もしやすくなるであろう。

教室での様々な行動がインフォーマル・グループに関係しているとすれば、クラス担任をはじめとする教師の存在が生徒のグループに影響していることも考慮に入れなければならない。河村(1998)は、「学級経営の原則」として、「教師が子どもたちの信頼の中でクラスの中心にドンといて、そのなかで子どもたちが和気あいあいと生活している集団」を教育力のあるクラス集団とした上で、そのようなクラス集団を育てるためには、「ふれあいのある人間関係」と「学級内のルール」が必要であると述べている⁴³⁾。クラスの生徒たちが、いくつものインフォーマル・グループに分かれているということは、逆に言えばインフォーマル・グループの集合したものがクラスということになる。つまり、子どもたち同士の関係というものがクラスを構成する基盤の1つとなる。このことから、教師は日常的に子どもたちに対して、無意識的・意識的問わず、関係形成に向けた働きかけや規範やルールづくりなどを日常的に行っているものと考えられる。そう考えると、必然的に教師の子どもたちへの働きかけが「いじめ」の抑制に関連してくるであろう。

子どもが安心して生きることのできる学校を考えるために、教育者はノルウェーでの成功例といえる、ダン・オールウェイズの「いじめ防止プログラム」をもう一度振り返るべきである。オールウェイズ(1986, 訳 1995)は、学校の中のクラスでのいじめ予防について以下の3点が出発点となるルールであると述べている²⁰⁾。「①私たちは他の人をいじめません」「②私たちはいじめられている人を助けます」「③私たちは独りぼっちになりやすい人を仲間に入れるようにします」。当然といえば当然であるが、この3つは、直接的いじめ(非身体的・身体的いじめ)だけでなく、関係性いじめにも有効である。これを学校において論じるにあたって重要なのは、いじめに加担することについての議論はなされなければならない。これは積極的にいじめに加担する者だけでなく、消極的に加担した者についても議論をする必要がある。消極的・受け身的にいじめに加担した者はいじめの「共犯者」であり、個人的に責任があるということを十分理解させなければならない。このような「いじめ」の原点に立ち返り、それを子どもたちに理解させることが「いじめ」を減少させる近道であると考えられる。

[結論]

本研究より、いじめの被害と加害が重複するという、現代の中学生の巧妙・陰湿な、不透明であるいじめの実態が明らかになり、気質的要因と環境要因がいじめに関連しているということが考えられた。さらに、このような形態の「いじめ」だからこそ、大人による「気づき」が一層重要性を帯びてくると考えられた。

また、今回は気質要因として AQ と LSRP を使用し、環境要因として家庭安らぎ、携帯電話、PC を用いたが、今後より細かい部分で気質・環境要因を「いじめ」との関連で検討していくためには、さらなる調査が求められる。

引用文献

- 1) Adolphs, R., Baron-Cohen, S., Tranel, D. (2002) : 「Impaired recognition of social emotions following amygdala damage」, *Journal of Cognitive Neuroscience*, 14, 1264-1274
- 2) 赤坂瑠以(2006) : 「携帯電話使用量が中学生・高校生の親子関係に及ぼす影響」, *日本パーソナリティ心理学会発表論文集*, 15, 124-125
- 3) Allison, T., Puce, A., McDCarthy, G. (2000) : 「Social perception from visual cue: Role of the STS region」, *Trends in Cognitive Science*, 4, 267-278
- 4) Amunts K, Kedo O, Kindler M, Pieperhoff P, Mohlberg H, Shah N, Habel U, Schneider F, Zilles K (2005) : 「Cytoarchitectonic mapping of the human amygdala, hippocampal region and entorhinal cortex: intersubject variability and probability maps.」, *Anat Embryol (Berl)*, 210 (5-6): 343-52.
- 5) Anderson, S. W., Bechara, A., Damasio, H., Tranel, D., Damasio, A. R. (1999) : 「Impairment of social and moral behavior related to early damage in human prefrontal cortex.」, *Nature Neuroscience*, 2, 1032-1037
- 6) 安藤晴彦(1995) : 自閉症の治療, 星和書店
- 7) 安藤玲子・高比良美詠子・坂本章(2005) : 「インターネット使用が中学生の孤独感・ソーシャルサポートに与える影響」, *パーソナリティ研究*, 14(1), 69-79
- 8) 安藤玲子・坂本章・鈴木佳苗・森津太子(2001) : 「コミュニケーション・メディアと孤独感・対人不安」, *日本心理学会第 67 回大会発表論文集*, 207
- 9) Barker, P. (1995) : *Basic Child Psychiatry*, 6th Edition
- 10) Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001) : 「The Autism-Spectrum Quotient(AQ): evidence from Asperger syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and

- mathematicians.」, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17
- 11) Barratt, E. S., Stanford, M. S., Dowdy, L., Liebman, M. J., Kent, T. A.(1999) : 「Impulsive and premeditated aggression: a factor analysis of self-reported acts. 」, *Psychiatry Research*, 86, 163-173
 - 12) Baxtur, M. G., Murray, E. A. (2002) : 「The amygdala and reward」, *Nature Reviews Neuroscience*, 3, 563-573
 - 13) Bechara, A., Damasio, H., Damasio, A. R., Lee, G. P. (1999) : 「Different contributions of the human amygdala and ventromedial prefrontal cortex to decision-making」, *Journal of Neuroscience*, 19, 5473-5481
 - 14) Blair, R. J. R. (2006) : 「The emergence of psychopathy: implications for the neuropsychological approach to developmental disorders」, *Cognition*, 101, 414-442
 - 15) Blair, R. J. R.(2003) : 「Neurobiological basis of psychopathy.」, *British Journal of Psychiatry*, 182,5-7
 - 16) Blair, R. J. R., Cipolotti, L.(2000) : 「Impaired social response reversal: a case of “acquired sociopathy”」, *Brain*, 123, 1122-1141
 - 17) Craig, W. D. 1998 The relationship in among bullying, victimization, depression, anxiety, and aggression in elementary school children. *Personality and Individual Differences*, 24, 123-130
 - 18) Cummings, J. L. 1993. Frontal-subcortical circuits and human behavior. *Archives of Neurology*, 50, 873–880.
 - 19) Damasio, A. R.(1994) : *Descartes’ Error: Emotion, rationality and the human brain.*, New York, Putnum
 - 20) ダン・オールウェーズ(1993) : いじめ こうすれば防げる, 松井賚夫・角山剛・都築幸恵 訳(1995), 川島書店
 - 21) Decety, J., Lamm, C. (2006) : 「Human empathy through the lens of social neuroscience.」 *Scientific World Journal*, 6, 1146-1163.
 - 22) 遠藤秀夫・塹江光子(1986) ; 「いじめの根源とその対策」, 聖徳学園岐阜教育大学紀要, 13, 77-104
 - 23) Engelberg, E., & Sjöberg, L.(2004); 「Internet use, social skills, and adjustment.」, *CyberPsychology and Behavior*, 7, 41-47
 - 24) Eslinger, P. J., Damasio, A. R. (1985) : 「Severe disturbance of higher cognition after bilateral frontal lobe ablation: patient EVR」, *Neurology*, 35, 1731-1741
 - 25) Forth, A., Kosson, D., Hare, R.D.(2003) : *The Hare Psychopathy Checklist: Youth Version*. New York, NY: Multi-Health Systems, Inc.

- 26) 深谷和子(1996) : 「いじめ」世界の子どもたち—教室の深淵—, 金子書房
- 27) 福井裕輝(2007) : 「サイコパス : 情動の病そして扁桃体機能不全説」, 臨床精神医学, 36(7), 883-890
- 28) 福井裕輝 (翻訳) (2009) : 「サイコパス—冷淡な脳—」, Blair, J. Mitchell, D., & Blair, K. *The psychopath: emotion and the brain.*, 星和書店
- 29) 福井裕輝・西中宏吏(2009) : 「子どもの攻撃性とパーソナリティ障害」, 齋藤万比古 (編集), *子どもの攻撃性と破壊的行動障害*, 82-89, 中山書店
- 30) 福井裕輝・並木千尋・山田真希子・村井俊哉(2005) : 「反社会性人格障害/サイコパス—人格の病理と情動—」, *精神科治療学*, 20(4), 363-371.
- 31) 藤森秀子・真栄城和美・八木下暁子・菅原ますみ(1998) : 「家族関係と子どもの発達(2)—家族関係と子どもの精神的健康について—」, *日本心理学会第62回発表論文集*, 272
- 32) Goyer, P. F., Anderson, P. J., Semple, W. E., Clayton, A. H., King, A. C., Compton-Toth, B. A., Schulz S. C., Cohen, R. M.(1994) : 「Positron-emission tomography and personality disorders」, *Neuropsychopharmacology*, 10(1), 21-28.
- 33) Grace, J., & Malloy, P. F. (2001) : 「Frontal Systems Behavior Scale: Professional manual.」, Lutz, FL: PAR.
- 34) Greenfield DN, Davis RA.(2002) : 「Lost in cyberspace: the web @ work.」, *Cyberpsychology & behavior*, 5(4), 347-53.
- 35) Hare, R.D., (2003) : *The Hare Psychopathy Checklist-Revised*, 2nd Ed. Toronto: Multi-Health Systems
- 36) Hecaen, H., Albert, M. L. (1978) : *Human Neuropsychology*, New York: Wiley
- 37) 石田靖彦・中村友一, 「中学生のいじめ体験に関する研究(2)—「加害者」「被害者」「観衆」「傍観者」「解決者」の心理的特徴について—」, *日本教育心理学会総会発表論文集*, 44, 168, 2002」
- 38) Kaltiala-Heino ,R., Rimpela,M., Marttunen, M., Rimpela, A., & Ramtanen,P. (1999); 「Bullying, depression, and suicidal ideation in Finnish adolescents: School survey.」
British Medical Journal, 319, 348-351
- 39) Kaltiala-Heino ,R., Rimpela,M., Ramtanen,P. & Rimpela, A.(2000): 「Bullying at schools: An indicator of adolescents at risk for mental disorders.」
Journal of adolescence,23,662-674
- 40) Kandel, E., Freed, D. (1989) : 「Frontal lobe dysfunction and antisocial behavior: a review」, *Journal of Clinical Psychology*, 45, 404-413
- 41) 川崎市・川崎市子どもの権利委員会(2008) : 川崎市子どもの権利に関する実態・意識

調査報告書

- 42) 川上亮一(1999) : 学級崩壊, 草思社
- 43) 河村茂雄(1998) : 「集団作りの二原則」, 國分康孝・河村茂雄・品田笑子・朝日朋子(編), 育てるカウンセリングが学級を変える, 図書文化社, 13-17
- 44) 警察庁(2004) : 「青少年の意識・行動と携帯電話に関する調査研究」
- 45) 警察庁(2007) : 「警察白書」
- 46) Ken Rigby(1997) : *Bullying in Schools: And what to do about it*, JKP
- 47) Keyser, C., Gazzola, V. (2006) : 「Towards a unifying neural theory of social cognition.」, *Progress in Brain Research*, 156, 379-401.
- 48) Kowalski, R. M.(2008) : 「What is Cyber Bullying?」, Kowalski, R.M., Limber.S.P., Augaston, P. W.(ed), *Cyber Bullying*, Blackwell Publishing, 181-190
- 49) 小島雅彦・伊沢功一郎(2001) : 「いじめに関する国内研究のレビューーいじめの定義と実態ー」, *心理教育相談研究(上越教育大学)*, 第1巻第1号, 111-120
- 50) 近藤日出夫(2006) : 「行為障害と発達障害」, *犯罪と非行*(148), 137-171
- 51) Kraut, R., Patterson, M., Lundmark, V., Kiesler, S., Mukhopadhyay, T., & Scherlis, W.(1998): 「Internet paradox: A social technology that reduces social involvement and psychological well-being?」, *American Psychologist*, 53, 1017-1031
- 52) Laakso, M. P., Gunning-Dixon, F., Vaurio, O., Repo, E., Soininen, H., & Tiihonen, J. (2002) : 「 Prefrontal volume in habitually violent subjects with antisocial personality disorder and type 2 alcoholism.」, *Psychiatry Research Neuroimaging*, 114, 95-102.
- 53) LaPierre, D., Braun, C. M. J., & Hodgins, S. (1995). : 「Ventral frontal deficits in psychopathy: Neuropsychological test findings.」, *Neuropsychologia*, 33, 139-151.
- 54) Levenson, M.R., Kiehl, K.A., Fitzpatrick, C.M.(1995) : 「Assessing psychopathic attributes in a noninstitutional population.」, *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 151-158
- 55) Loeber R.(1991) : 「 Antisocial behavior: more enduring than changeable?」, *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry* 1991, 30(3), 393-397
- 56) Loeber, R., & Stouthamer-Loeber, M. (1998) : 「 Development of juvenile aggression and Violence Some common misconceptions and controversies」, *American Psychologist*, 53(2), 242-259.
- 57) Michael R. Levenson, Kent A. Kiehl, & Cory M. Fitzpatrick(1995) : 「Assessing

- Psychopathic Attributes in a Noninstitutionalized Population」 *Journal of Personality and Social Psychology*,68,151-158
- 58) 右高和生(2009)：「児童・生徒の学校と家庭における生活とストレスー市内小学生と中学生の実態調査の結果からー」,現代教育学部紀要,第1号,179-189
- 59) 三島浩路(1997)：「対人関係能力の低下といじめ 誌上シンポジウム「対話関係能力の低下と現代社会」(提案論文1)」,名古屋大学教育学部紀要(心理学),44,3-9
- 60) Mitchell, D. G. V., Colledge, E., Leonard, A., & Blair, R. J. R. (2002)：「Risky decisions and response reversal: Is there evidence of orbitofrontal cortex dysfunction in psychopathic individuals?」, *Neuropsychologia*, 40, 2013-2022.
- 61) Moffitt, T. E. (1993)：「The neuropsychology of conduct disorder」, *Development and Psychoopathology*, 5, 135-152
- 62) 文部科学省(2007)：「平成 18 年度 「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の見直しについて」
- 63) 文部省(1985)：「初等中等教育局中学校課「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」
- 64) Montes, G., Halterman, JS.(2007)：「Bullying among children with autism and the influence of comorbidity with ADHD: a population-based study」, *Ambulatory Pediatrics*, 7(3),253-257
- 65) Morgan, A. B., Lilienfield, S. O. (2000)：「A meta-analytic review of the relation between antisocial behavior and neuropsychological measures of executive function」, *Clinical Psychology Review*, 20, 113-136
- 66) 森田洋司・清水賢二(1986)：いじめー教室の病ー,金子書房
- 67) 森田洋司・清水賢二(1994)：「いじめー教室の病(改訂版)」,金子書房
- 68) 森田洋二(1995)：「いじめ」問題と不登校,稲村博・斎藤友起雄編,現代のエスプリ(別冊),いじめ自殺,至文堂,159-170
- 69) 村上文洋・前田由美(2006)：「モバイル社会白書 2006」,暮らし モバイル社会研究所(編),58-59
- 70) 多田早織,杉山登志郎,西沢めぐみ他(1998)：「高機能高汎性発達障害のいじめを巡る臨床的研究」,小児の精神と神経,38,195-204
- 71) 内藤朝雄(2007)：<いじめ学>の時代,柏書房
- 72) 中井久夫(1996)：いじめとは何か「いじめと癒し」,仏教,37,116-123
- 73) 尾木直樹・渡部樹里(2007)：「教育再生会議のいじめ対策と学校」,子どもの権利研究,11,16-21
- 74) 岡宏子(1979)：「子どもの人格形成と家庭の役割」,文部時報,1224号,31-36
- 75) Oliver, C. Schultheiss., Michelle, M. Wirth., Christian, E. Waugh., Steven, J.

- Stanton., Elizabeth, A. Meier., Patricia, Reuter-Lorenz.(2008) : 「Exploring the motivational brain: effects of implicit power motivation on brain activation in response to facial expressions of emotion」 , SCAN, 3, 333-343
- 76) Pennington, B. F., Ozonoff, S. (1996) : 「Executive functions and developmental psychopathology」 , Journal of Child Psychology and Psychiatry, 37, 51-87
- 77) Phillips, M. L., Young, A. W., Scott, S. K., Calder, A. J., Andrew, C., Giampietro, V., Williams, S. C. R., Bullmore, E. T., Brammer, M., Gray, J. A. (1998) : 「Neural responses to facial and vocal expressions of fear and disgust」 , Proceedings of the Royal Society of London B, 265, 1809-1817
- 78) Phillips, M. L., Young, A. W., Senior, C., Brammer, M., Andrew, C., Calder, A. J., Bullmore, E. T., Perrett, D. I., Rowland, D., Williams, S. C. R., Gray, J. A., David, A. S. (1997) : 「A specified neural substrate for perceiving facial expressions of disgust」 , Nature, 389, 495-498
- 79) Poulin, F., Boivin, M.J.(1993) : 「Reactive and proactive and proactive aggression: evidence of a two-factor model.」 , Psychology Assessment, 12, 115-122
- 80) 漆畑輝映・加藤義男(2003) : 「思春期高機能広汎性発達障害の学校不適應について」 , 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究所紀要, 第2号, 191-201
- 81) Raine, A. (2002) : 「Annotion: the role of prefrontal deficits, low autonomic arousal, and early health factors in the development of antisocial and aggressive behavior in children.」 , Journal of Child Psychology and Psychiatry, 43, 417-434.
- 82) 李垠周(2007) : 「韓国の非行問題 : インターネット中毒と学校暴力」 , 子どもの権利研究, 11, 43-45
- 83) van, Roekel, E., Scholte, R. H., Didden, R.(2009) : 「Bullying Among Adolescents With Autism Spectrum Disorders: Prevalence and Perception」 , Journal of Autism and Developmental Disorders, 8
- 84) Roland ,E., Idsoe, T.,(1995) : 「Aggression and bullying」 , Aggressive Behavior, 27, 446-462
- 85) Ross SR, Benning SD, Adams Z. 2007. Symptoms of executive dysfunction are endemic to secondary psychopathy: An examination in criminal offenders and noninstitutionalized young adults. Journal of Personality Disorders, 21(4), 384-399.
- 86) Roussy, S., & Toupin, J. 2000. Behavioral inhibition deficits in juvenile psychopaths. Aggressive Behavior, 26, 413-424.

- 87) 埼玉県教育局(2008) : ネットいじめ等対策検討委員会, ネットいじめ等対応マニュアル
- 88) 坂西友秀・岡本祐子(2004) : いじめ・いじめられる青少年の心, 北大路書房
- 89) 桜井茂男・岩立京子・渡部玲二郎・小林真・杉原一昭(1998) : 「発達研究者から見た“子どものストレス”」, 日本心理学会第 62 回発表論文集, S62
- 90) 澤田章子(1999) : 「学校と家族」, こころの科学 85, 23-27
- 91) Schneier, 2003, *Beyond fear: Thinking sensibly about security in an uncertain world*. New York: Springer Verlag.
- 92) Shaw, L. H., & Gant, L. M. (2002) : 「In defense of the Internet: The relationship between Internet communication and depression, loneliness, self-esteem, and perceived social support.」, *CyberPsychology and Behavior*, 5, 157-171
- 93) 柴野昌山(1990) : 児童心理 4 月号臨時増刊, 32-37, 金子書房
- 94) 清水賢二(1998) : 「現代いじめ世界の三層構造(1)現代いじめの諸特徴」, 佐伯胖・黒崎勲・佐藤学・田中孝彦・浜田寿美男・藤田英典 編, 岩波講座 4, 現代の教育—危機と改革—, 「いじめと不登校」, 岩波書店, 102-105
- 95) Singer, T., & Lamm, C. (2009) : 「The social neuroscience of empathy.」, *The year in cognitive neuroscience 2009*, *Annals of the New York Academy of Sciences*, 1156, 81-96
- 96) Singer, T., Leiberg, S. (2009) : 「Sharing the emotions of others : the neural bases of empathy.」, Gazzaniga, MS. (Ed), *The Cognitive Neurosciences IV.*, 971-984. Cambridge: MIT Press
- 97) Smith, S. S., Arnett, P. A., & Newman, J. P. (1992) : 「Neuropsychological differentiation of psychopathic and nonpsychopathic criminal offenders.」, *Personality and Individual Differences*, 13, 1233-1243.
- 98) Sourander, A., Jensen, P., Ronning, J. A., Niemela, S., Helenius, H., Sillanmaki, L., Kumpulainen, K., Piha, J., Tamminen, T., Moilanen, I., Almqvist, F.(2007) : 「What is the early adulthood outcome of boys who bully or are bullied in childhood? The Finish “From a boy to a Man” study.」, *Pediatrics*, 120(2), 397-404
- 99) Sprengelmeyer, R., Rausch, M., Eysel, U. T., Przuntek, H. (1998) : 「Neural structures associated with the recognition of facial basic emotions」, *Proceedings of the Royal Society of London B*, 265, 1927-1931
- 100) 杉山登志郎(1994) : 「自閉症に見られる特異な記憶想起現象 : 自閉症の time slip 現象」, *精神神経学雑誌*, 96, 281-297
- 101) 杉山登志郎(1995) : 「正常知能広汎性発達障害と精神科的問題」, *発達障害研究*, 17,

117-124

- 102) 杉山登志郎・辻井正次(2001)：第41回児童青年精神医学会総会ワークショップ「高汎性発達障害」, 児童青年精神医学とその近接領域, 42, 114-123
- 103) 高橋良臣(2005)：「不登校・ひきこもりのカウンセリング」, 金子書房
- 104) 高德忍(1999)：いじめ問題ハンドブック, つげ書房新社
- 105) Stuss, D. T., Benson, D. F. (1986)：The Frontal Lobes, New York: Raven Press
- 106) 住田正樹(2007)：「いじめのタイプとその対応」, 放送大学研究年報, 25, 7-21
- 107) 十一元三(2002)：「自閉性障害の診断と治療」, 臨床精神医学, 31(9), 1035-1046
- 108) 滝充(1997)：学校から「いじめ」をなくす, 別冊教育技術9月号, 小学館
- 109) 滝川一廣(1996)：「いじめ考」, こころの科学, 70
- 110) ウタ・フリス(1991)：新訂 自閉症の謎を解き明かす, 富田真紀・清水康夫・鈴木玲子訳, 東京書籍発行
- 111) 内山喜久夫(1983)：現代社会とストレス, サイコロジー, サイエンス社
- 112) 若林明雄(2003)：「自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版について－自閉症傾向の測定による自閉性障害の診断の妥当性と健常者における個人差の検討－」, 自閉症とADHDの子どもたちへの教育支援とアセスメント, 47-56
- 113) Willard, N.(2006)：Cyber bullying and cyberthreats; Responding to the challenge of online social cruelty, threats, and, distress., Engene OR: for Safe and Responsible Internet Use.
- 114) Willard, N.(2003)：「Off-campus, harmful online student speech.」, Journal of School Violence, 1(2), 65-93
- 115) Wing, L., and Gould, J.(1979)：「Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: Epidemiology and classification」, Journal of Autism and Developmental Disorders, 9, 11-29
- 116) 山中一英(1998)：「大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析研究」, 社会心理学研究, 13, 93-102
- 117) Yang, Y., Raine, A., Lencz, T., Bihrlé, S., LaCasse, L., & Colletti, P. (2005)：「Volume reduction in prefrontal gray matter in unsuccessful criminal psychopaths.」
Biological Psychiatry, 57, 1103-1108.
- 118) 横湯園子(2002)：教育臨床心理学 愛・いやし・そして回復, 東京大学出版会
- 119) 吉田寿夫・荒田則子(1997)：「とかく女の子は群れたがる？－児童期における対人関係の性差に関する研究－」, 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 298
- 120) 吉住美保, 上田敬太, 大東祥孝, 村井俊哉.(2007)：「前頭葉機能に関する行動評価尺度 Frontal Systems Behavior Scale 日本語版の標準化と信頼性, 妥当性の検討.」, 精神医学, 49(2), 137-14

10. 指定入院医療機関における司法精神科看護に関する研究

研究分担者：山口しげ子

平成21年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）
心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究
研究分担報告

指定入院医療機関における司法精神科看護に関する研究

テーマ 医療観察法スタッフへの暴力発生後の危機介入

研究分担者 山口 しげ子 国立精神・神経センター病院

研究要旨：医療観察法指定入院医療機関(以下医療観察法病棟)に関わるスタッフのメンタルヘルスに向けたマネジメントが重要であることは、欧米でも早くから指摘されてきた。暴力マネジメントに対して包括的暴力防止プログラム（Comprehensive Violence Prevention and Protection Programme: CVPPP）を医療観察法病棟では、導入している。CVPPPでは、デブリーフィングも構成要素の1つであるが、古典的な（フォーマルデブリーフィング）方法は、その効果について一般的に否定されている。その一方、臨床ではナチュラルデブリーフィングでのフォローは有益であると実感している。しかし現状では、スタッフに向けたメンタルヘルスマネジメントは、対象者に対するケアに比較し、十分に提供されているとは言い難い。

医療観察法の病棟では暴力のリスクの高い対象者であっても、CVPPPによるディエスカレーションにより、結果としてダメージの大きい暴力にまで至らずに済んでいる事例が多い。しかし、たとえ軽微な暴力であっても繰り返される場合等、暴力は大きさだけが問題とは言えない。

タイムリーかつ正確な情報をスタッフが把握できる事は、1人1人がスタッフとして大切にされているという安心感の形成にも繋がるので、リスクマネジメントの観点からも、スタッフのモチベーションの維持のためにも重要である。情報の共有は重要であるが、医療観察法病棟では精神保健福祉法による病棟の3～4倍もの数、50名以上ものスタッフが配置されている為、情報伝達は非常に困難な側面があり様々な工夫が求められる。

今回の研究では、全国の6カ所の医療観察法病棟の多職種スタッフ（CVPPPの受講により、暴力発生後のフォローの必要性が理解されている）に対して、「スタッフが対象者から暴力を受けた場合のメンタルヘルスマネジメント」に焦点を当て、アンケートによる調査を実施する。アンケートでは、①スタッフが暴力の被害者となった場合の診療録への記載②暴力を受けたという情報の把握手段③暴力の被害を受けた後の介入の有無④介入の効果⑤介入すべきと考える暴力のレベル（自分自身・他者）⑥IES-R実施⑦介入により改善が得られたか

以上7つの視点によるアンケート調査を実施する事により、医療観察法病棟において暴力を受けたスタッフへのメンタルヘルスマネジメントへの示唆が得られる

研究協力者：五十音順		
秋山 尚紀	国立がんセンター中央病院	
今村 芙美	国立精神・神経センター病院	
佐藤 功	同上	
高崎 邦子	同上	
平林 直次	同上	
三澤 孝夫	同上	
三澤 剛	同上	
脇坂 良子	同上	

A. 研究目的

- ・医療観察法病棟の診療録の実名記録の実態と、その背景を調査する
- ・医療観察法病棟でのスタッフが受けた暴力発生後の情報収集の方法を明確化し、危機介入について実態を把握する

B. 研究方法

1. 対象

国立精神・神経センター
 肥前精神医療センター
 さいがた病院
 花巻医療センター
 東尾張病院
 北陸病院
 上記医療観察法病棟の多職種スタッフ
 (約 350 名)

2. 除外となる対象

研究への参加を拒否した者

3. 研究対象施設の選定の方法

医療観察法病棟の開棟が H17~18 年である
 医療観察法の病床数は 33 床を有する

4. 研究期間

- ①アンケート実施期間 平成21年 7月
- ②アンケートの結果集計 ~平成21年 12月

- ③21年度のまとめ ~平成22年 2月
- ④IES-Rの結果集計 ~平成22年 9月
- ⑤アンケート結果とIES-Rの結果を分析
~平成22年12月
- ⑥研究全体のまとめ ~平成23年2月25日

3. 手続き

本研究は、平成 21 年 4 月国立精神・神経センター第 9 回倫理委員会承認を受けた

1) 情報の収集方法

- ①対象施設の看護師長へ文書と口頭で主任研究者が H21. 6. 26・27 に説明し、研究協力を依頼した。
- ②各対象施設の看護師長へ説明書・同意書・アンケートを H21. 7 初旬に郵送。
- ③対象施設の看護師長がスタッフに説明文書に基づき説明後、配布する。
- ④同意書及びアンケートは、各施設に H21. 7. 28 まで留め置き、回収。
- ⑤対象施設の各看護師長により、郵便で主任研究者宛てに返送。
- ⑥開封は、主任研究者と研究協力者により実施。

2) データベースの作成

- ①国立精神・神経センター医療観察法病棟内で研究用 ID に置き換え匿名化する
- ②アンケート結果は、コード化する
- ③データベースは医療観察法病棟内で管理する

3) 倫理的配慮

- ①個人を特定することができる部分は、情報の収集範囲から除いた
- ②データベースは上記 2) の通り作成管理する
- ③同意された場合にのみ調査への協力を求めた
- ④途中で、参加を取りやめた場合でも不利

益とはならないことを明記した

⑤原本は、研究が終わった段階で、シュレッダーにかけて破棄する

⑥結果報告書が完成した後、対象施設に報告文書を郵送する

C. 研究の進捗状況

①研究対象の6施設の多職種スタッフに向けてアンケートおよびIES-Rを実施した。

調査方法：郵送調査法

アンケートの構成

基本情報：選択回答方式

各設問：選択回答方式及び、SD法

②アンケート・IES-Rの回収数

母数 354

回収数 255

回収率 72%

③データの解析方法

単純・クロス集計

χ^2 検定

統計ソフトSPSS

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
吉川和男	「責任能力と精神鑑定」わが国の責任能力判定の行方	中谷陽二	責任能力の現在－法と精神医学の交錯	金剛出版	東京	2009	65-85
吉川和男 (訳)	暴力を治療する－精神保健におけるリスク・マネジメント・ガイド	Anthony Maden.		星和書店	東京	2009	
吉川和男	心神喪失者等医療観察法	総編集：山内俊雄	精神科専門医のためのプラティカル精神医学	中山書店	東京	2009	636-640
吉川和男 大宮宗一郎	コミュニティ・ケア-マルチシステムック・セラピーー (MST)	総編集：齋藤万比古	子どもの攻撃性と破壊的行動障害	中山書店	東京	2009	188-202
岡田幸之	「裁判員制度と精神鑑定」刑事責任能力と裁判員制度		責任能力の現在－法と精神医学の交錯	金剛出版	東京	2009	120-134
福井裕輝, 西中宏史	パーソナリティ障害	総編集：齋藤万比古	子どもの攻撃性と破壊的行動障害	中山書店	東京	2009	82-89
福井裕輝 (訳)	サイコパス－冷淡な脳	James Blair/ Derek Mitchell/ Karina Blair		星和書店	東京	2009	

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Per Lindqvist, Pamela J. Taylor and Emma Dunn, James R. P. Ogloff, Jeremy Skipworth, Peter Kramp, Sean Kaliski, Kazuo Yoshikawa, Pierre Gagné, Lindsay Thomson	Offenders with Mental Disorder on Five Continents: A Comparison of Approaches to Treatment and Demographic Factors Relevant to Measurement of Outcome	International Journal of Forensic Mental Health	Volume 8, Issues 2	81-96	2009
吉川和男	精神鑑定をめぐる諸問題	こころの臨床 a'・la・carte	第28巻3号	461-466	2009

吉川和男	「特集 精神鑑定と責任能力」特集にあたって	こころの臨床 a'・la・carte	第28巻3号	390-391	2009
吉川和男	医療観察法制度の現状と課題	医療福祉建築	No165	10-11	2009
吉川和男, 佐野雅隆男	医療観察法における施設基盤の整備	臨床精神医学	38(5)	.617-621	2009
岡田幸之	裁判員制度における精神鑑定	司法精神医学	4(1)	88-94	2009
岡田幸之, 安藤久美子, 黒田治, 五十嵐禎人, 平林直次, 松本俊彦, 樽矢敏広, 野田隆政, 平田豊明	裁判員制度における精神鑑定の課題－全国の模擬裁判に参加した精神科医らの意見調査から	精神科	14(3)	183-189	2009
富田拓郎, 岡田幸之, 松本俊彦, 菊池安希子, 美濃由紀子, 福井裕輝, 吉川和男	反社会的行動・破壊的行動を含めた、中学校向け包括的メンタルヘルススクリーニング尺度の学校における臨床応用－都立公立中学校での試行的調査と学校への支援	精神保健研究	21(54)	53-62	2008
菊池安希子	身体医学的に説明できない症状の認知行動療法	精神科治療学	24(276)	119-121	2009
菊池安希子 (書評)	認知行動療法と構成主義心理療法：理論・研究そして実践 マイケル・J・マホーニー編	ブリーフサイ コセラピー研 究	18(1)	68-70	2009
菊池安希子, 美濃由紀子	国立精神・神経センター・医療観察法病棟が、そのプログラムとノウハウを公開します① 「まずは治療プログラムの枠組みを紹介します」	精神看護	13(1)特別記事	69-74	2010
Taiki Takahashi, Tarik Hadzibeganovic, Sergio A. Cannas, Takaki Makino, Hiroki Fukui, and Shino bu Kitayama	Cultural Neuroeconomics of Intertemporal Choice	Neuro Endocrinol Lett.	13;30(2)		2009
福井裕輝	触法精神障害者の処遇－反社会性の治療	精神科治療学	24(9)	1025-1031	2009
福井裕輝	脳と責任能力	こころの臨床 a'・la・carte	第28巻3号	517-522	2009